

特集

今、「よい仕事と社会連帯経営」を 考えるとき

本号の特集テーマを「今、『よい仕事と社会連帯経営』を考えたとき」にしました。

今年2月に「よい仕事研究交流集会」を開催し、地域の困難を多様な住民の主体や課題を抱えている当事者自身が連帯して、仕事おこしを通じて地域や自らの課題を解決する実践が数多く報告されました。具体的に言えば地域循環型産業である農業や林業、そして対人援助を中心とする現場で働きながら、精神障がい者、アルコール依存症経験者、失業している若者等が、弱さを力に変え、地域の多くの人と出会い、仕事おこしをしていくドラマが多くの実践と共に語られました。(協同の発見269号既報)

また2014年から広島市が協同労働で地域づくりや仕事おこしをする「広島市協同労働プラットフォーム事業」が始まり、2015年度は4つの市民団体が、仕事おこしに向かっています。協同労働を活用し、まちづくりをしていきたいということが住民に広がり始めています。

このように、協同労働は既存の働く人のものだけではなく、協同労働の価値を住民や社会に開くものになってきており、協同組合の組合員のメンバーシップ性を超えて、生活と地域を焦点にして、地域課題を地域住民や当事者が参画して、解決する主体形成の動きが各地で生まれています。

経営論という側面からみたときに、現局面において農協や生協、そして労働者協同組合(ワーカーズコープ)も含めて協同組合組織における協同組合の経営論は一般企業で使われている資本主義的経営論の枠の中に納まっているものではないかと考えています。その枠を超えることや社会連帯経営そのものは何かを実践から深めるために、この半年の間で社会連帯経営に関わる学習会や研究会を開催してきました。その中で社会連帯経営を「人の営みを中心とした」経営論にしていくことや組合員自身が主体となり考える経営論のあり方が見え始めています。

本号を特集の狙いとして、3点考えています。

第1は「よい仕事」の実践から、実践者自身が、社会連帯経営をどう理論化・普遍化をしていくのかを考えることです。特に本号では労協センター事業団の各事業本部の本部長を中心にご寄稿いただきました。それは今の労協運動を担う中核であるリーダーが社会連帯経営をどのように考えているのかを中心に掲載する中で、実践者自身が研究をするという視点を大切にしながら、ワーカーズコープで働く仲間に、社会連帯経営とは何かを考えるきっかけをつくりたいと考えたからです。

第2は、本号ではワーカーズコープで働くリーダーに今回ご寄稿をいただいたが、研究者の会員の皆様にはあえてレポートのご寄稿をいただくことをしませんでした。研究者の方から本号を読み終わった後、研究者の会員の皆さんにとって「社会連帯経営」とは何かということの感想をいただければと考えています。それぞれのいただいた感想については、できる限り今後の研究誌の紙面上で紹介をしながら、継続的に「社会連帯経営」を深められたらと考えております。

第3は今後「よい仕事と社会連帯経営」をテーマに地域研究会を開催していきたいと考えています。その際に本特集号をテキストとしてご活用をいただければと思っています。

本号では「社会連帯経営はこれだ」という回答めいたものを提示することではなく、社会連帯とは何かを会員の皆さんと議論をするために、実践から考える社会連帯経営のあり方を掲載させていただきました。

協同総合研究所は実践と研究と結合の研究所として、実践者と研究者がともに「『社会連帯経営』とは何か」を学ぶプラットフォームづくりをこの特集号を契機として作ることができればと考えています。

(協同総合研究所 事務局長 相良孝雄)